

自営業者の「嫁」から「社会福祉士」へ 「自己覚知」を深めて—自己肯定感を取り戻すまで

酒井かな子

はじめに

私は約 25 年間、ドメスティック・バイオレンス（以下、「DV」と略す）を受けながらも離婚に踏み切れず、自営業者の家族従業員としてその仕事に従事していた。2 年程前に夫の元を離れ、1 年前に離婚。この春、社会福祉士の資格を取得。現在は、八王子市にある知的障がい者施設で、農園芸部門の責任者として障がいのある方々と共に無農薬の野菜作りをしている。

社会福祉士などの対人援助者には自己理解「自己覚知^{じこかくち}」が重要とされている。「自己覚知」とは他者を受け入れる為には自分自身を知ること、自己の感情を見つめる能力のことである。自らの態度、感情を十分に知り得てこそ、他者の受容をもたらすと捉えられている。私も対人援助者としての専門性を高める為に「自己覚知」を繰り返し行っている。

このレポートでは、私自身が私を「個人」として捉え、メタ認知を高めた「自己覚知」を試みた。長いDV被害の中で生きてきたひとりの女性の人生軌跡として記述し、そこからから見えてくるジェンダーの視点や充足されていない社会資源、社会状況を考察した。さらに、私自身が過去を振り返る（物語を語る）ことを体験し、どのような変化があったのかを当事者の視点とソーシャルワークの視点から記述した。

私の文章から、人々が困難な状態に陥ることは個人と社会システムの交互作用により生じているのだという理解、全ての人々が人生の選択によって不利な立場にならない社会の実現に向けて、私たちに何ができるのかを考える機会になればと思っている。

前半は私の生い立ち、夫からのDVを受けながらも家族従業員として働いていた日常を私の視点を基に記述した。次に、過去の具体的な体験を軸に私の置かれていた状況を客観的に捉え、私の内的要因、外的要因、ミクロ、メゾ、マクロレベルで社会の実体を考察し、さらにひとりの女性のライフコースからジェンダーの視点、社会資源を考えてみた。後半は私が過去の経験を語るにより得られたレジリエンス、振り返ることの可能性を書いた。最後に、ソーシャルワークとの出会いにより変化した意識について記述した。

第1章 結婚

1. ファザーコンプレックス

私と姉（二卵性双子）の両親は私たちが5歳の頃、離婚。父は離婚後、すぐに再婚した。

両親の離婚理由は父の女性問題であった。親権は父、母は高収入の父からわずかな養育費をもらい、養育は母ということになっていた。母は離婚後、昼夜働き、こつこつと貯めた資金を元に飲食店を経営していた。景気上向きのバブル前、母は居酒屋経営も始め、その店は

★この続きは『2014 年度「日本女性学習財団賞」受賞レポート集 学びがひろく vol.4』で！